

2015年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 人間福祉学部・教授・今井 小の実

研究課題:「社会事業の展開と女性の果たした役割—方面委員へのストラスブルク制度導入に着目して—」

研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

2015年度特別研究期間に出した成果は次の5点である。

1つは、前年度の研究、すなわち戦前の山口県の社会事業、特に方面委員に焦点をあて、社会教化に傾斜していった経緯を検証し、感化救済事業との連続性を明らかにした研究を論文として執筆したことである。その成果は現在、社会事業学会の学会誌に投稿中である。

2つめは、2014年から2015年の1年間における社会福祉界における歴史研究の先行研究を網羅したリストを作成し、可能な限りすべての論文著書に眼を通し、日本社会福祉学会の機関誌『社会福祉学』における「学界の回顧と展望」の歴史分野の執筆者としての責務を果たしたことである。

3つめはジェンダーの視点からスウェーデンと日本のケアの社会化の歴史的比較を行い、日本の問題点を明らかにし、今後の展望につなげたことである。この成果については2016年2月刊行の国立社会保障・人口問題研究所の機関誌『季刊社会保障研究』に、「ケアの社会化・ジェンダー平等化と福祉国家—スウェーデンの歴史から何を学ぶか—」という題名で掲載されている。

4つめは、龍谷大学の青木恵理子教員代表の共同研究の一人として、その成果を「「新しい女」平塚らいてうと西欧母性主義の出会い」というタイトルで執筆、現在、本として刊行準備中である。

5つめは、十三にある児童養護施設博愛社の史資料保存と研究を行う科研の共同研究の成果として、小橋実之助の日誌の翻刻をもとに、大大阪記念博覧会と博愛社の関係を明らかにした論文を執筆し、報告書に掲載したことである。

最後に今回の研究費の多くを投じたのが、海外視察である。ドイツ、フランス、ベルギーを訪問し、戦前の社会事業の施設、制度に影響を与えた諸施設を視察、また資料を収集した。ドイツではアウグスブルクに現存する高齢者の救貧施設フッゲライ、フランスは主にストラスブルグでの史資料収集と市役所職員（フィリップ氏）との面談、ベルギーでは未婚女性の受け皿ともなったベギン修道会（ブルージュ）、また市民の相互扶助の草分け的存在ともなったギルド（ヘント）の視察を行い、今後の歴史研究、また国際比較研究のために有益な情報を得ることができた。今回、渡欧についてはテロの不安がありギリギリまで迷ったため、調査準備が十分ではなく、具体的な研究成果がすぐに出せないことが惜しまれるが、今後の研究の際に必ず還元していきたいと考えている。

研究成果概要は、データは gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください。

